【人文学】〈研究論文〉

十六・七世紀、有馬にあったキリシタン町の解析

Analysis of the Christian Town of Arima in 16th and 17th century

村田　明久[*1]

MURATA Akihisa

Summary

From the 16th to the 17th century, the reports of Society of Jesus missionaries who visited Japan fill the blanks of Japanese history in the Middle Ages. However, for lack of Japanese documents, it is difficult to create a concrete local image technically. Arima was a central place in the Christian era and provides a representative example. I analyzed the local constitution of the Christian town of Arima, introduce the study results because I think they help to clarify the overall perspective.

Keywords：(**Arima, Christian town, local image, persecution**)

十六・七世紀に日本を訪れた宣教師のイエズス会報告は、中世日本の歴史の空白を埋めてくれる。しかし、日本側資料の不足のために、具体的な地域像を描くことは専門的にも難しい。とりわけキリシタン町の中心地であった有馬はそうした代表例である。この有馬のキリシタン町の地域構成について解析してきたが、全体像を明らかにできたと考えるので、これからその研究内容を紹介する。

有馬にあったセミナリヨ（神学校）、教会などの推定地を調べると、①西正寺説（1）②日野江城説（2）③原城説（3）④浦口川流域説（4）⑤称行寺地番説（5）と、執筆者は専門家、団体、行政関係に及ぶ。だが、未だ確実性に乏しいようだ。

根拠となる資料は、イエズス会記録、歴史書の外、口伝、解釈読替え、出典記載の無いものまで見られた。この状態で行政や専門家が企画や開発を立てるのは、真の姿まで壊されかねず慎重を期すことを願う。同じことは自らにも降る言葉なのだが、下述の如く、キリシタン町の構成のほぼ全容を言及できたと考える。後世の人の疑問や発見は、本論を検証すればよく、本稿はそのための基礎となることを願い上梓する。

根拠資料は、同時代の記録類のみを対象とし、他は一切排除した。また翻訳文献の読み替えは一切しない。イエズス会士の正確な報告能力、翻訳者の力量の二つを信じた。記録類には外国側、日本側があるが、キリシタン町は外国側資料を主に、日本側資料で裏付けることを旨とした。

有馬のキリスト教界の展開に応じて、本拠が港町の戦国期（第一期）、本拠が有馬の織豊期（第二期）、本拠が有馬の徳川期（第三期）、の三期に時代区分して有馬のキリシタン町を解析した。

一　第一期

有馬領へのキリスト教布教は、一五六三年、十三代有馬義貞の時に口之津、島原の二港を開港した。寺院の抵抗が厳しくてキリシタン町がつくれず、口之津港の滞在が長かったのであろう。一五七六年、有馬地域に初めて教会をつくり、同年に受洗した。

（一）有馬の城

ルイス・フロイス『日本史』にいう「有馬の城」とは何処か。次の資料1から、十四代晴信（鎮純）が居たのは日野江城に違いない。後に示す資料 27 から嫡男直純（十五代）が移り住んだのも日野江城である。原城の名は『日本史』に見当たらず、原城説①は有り得ない。

「さらに進むと日野江と称する有馬の城があり、ここに有馬殿が住んでいる。口之津から二里の所で、我らはここに下の地方の神学校を有し、貴族の子弟多

[*1] 大学院工学研究科　博士（工学）

2017 年 3 月 27 日受付
2017 年 6 月 21 日受理

数を収容している。」（資料１）（6）

（二）寺院と教会

一五六三年にアルメイダが布教を始めた頃、信者を増やしたが厳しい抵抗にあっていた。資料２・３に、抵抗勢力の中心メンバーは、島原のイエンゲ（Yengue）、ショクジ（Xocuji）、ダイマンボウ（Daimanbo）で、ついに僧侶による毒殺、殺傷事件が起こった、とフロイスは記した。当時の肥前地域を訪れた伊勢御師三頭大夫文書の資料４によると、ショクジは聖興寺、ダイマンボウは大満坊である。イエンゲは「会下」「会解」に当たり、同門の僧侶又は寺院の意味で、龍珠院とみられる（7）。

「ルイス・デ・アルメイダ修道士がトイ・ジョアンの家でキリシタンたちに説話を行なっていたところ、一人の仏僧が戸口から入り込んで来た。彼は著名なダイマンボウという僧侶の門弟で・・・大胆不敵にも抜刀し、同宿である説教師および修道士を殺害しようとした。」（資料２）（8）

「その地の三つの僧院、すなわちイエンゲ、ショクジ、ダイマンボウの住職たちは、島原の殿の母親でショウシュンという鬼婆と相談し、・・・彼を茶（会）に招いた。・・・彼女は彼に毒を飲ませ、そのために彼は数日後に死んだという。」（資料３）（9）

永禄四年（一五六一）【有馬の分】保（宝）福寺、威徳院、訪福院、金蔵寺、遍照院、円教坊、北岡山如意坊、西光寺、あらかわ大法印、等覚院、【島原の分】大満坊、聖興寺（資料４）（10）

（三）有馬領と初期教会地

資料５によれば、義貞は、有馬の優れた仏僧の寺院（サイコウ寺）を教会地としてイエズス会に与え、そこに教会を建設した。この教会は、一五七六年九月にはあったが、義貞の死去がもとで、翌二月に解体され、わずか一年間も存続しなかった。

「有馬には、大勢の仏僧たちの中に、一人、大いに学識と権威のある人がおり、・・・その仏僧は、サイコウ寺[Saicoji]という寺院の住職であった。・・・ドン・アンデレは、・・・さっそく仏僧たちの寺院とか宿坊を（イエズス）会に贈与し、・・・かくてその地にはさっそく教会が建てられて、キリシタンたちが来て（ミサ聖祭）に与かれるようになり、人々に洗礼を授けるのに適当な場所を持てるに至った」（資料５）（11）

有馬の最初の教会は何処にあったのか。この「サイコウ寺」について、説①④は、北有馬に残る地名の「西正寺」の地としたようだ。根井浄氏は、資料４により、有馬に「サイコウ寺」の発音通りに「西光寺」が確かに存在したことを示した（12）。このことは「西正寺」説を否定する重みを持つが、肝心の教会所在地までは触れていない。三頭大夫文書によれば、永禄四年（一五六一）、十年（一五六七）、十一年（一五六八）に「西光寺」の記載があるが、その後の記載はない。このことは一五七六年の資料５と時期的に矛盾しない。

このように「西光寺」の存在は確定的だが、北有馬にその痕跡が見つからず、どうするか。これを方向づけてくれるのが、資料６の一五八〇年度・日本年報である。この意味内容を読み解くと、「有馬領のキリシタン宗団を有馬、有家、口之津の三つに分担した。セミナリヨはそのうち筆頭の有馬に設けるのがよいが、（義貞が与えたセイコウ寺の地所はそうでないため）代わりに、別の場所で有馬の最良の地を得た」と解せられる。すでにセイコウ寺が北有馬にあったなら「別の場所」を求める必要はなく、セイコウ寺は北有馬になかったと思われる。これ故、最初の教会地を北有馬に想定する必要はないと考える。西光寺については別の機会に述べたい。

「ドン・プロタジオは司祭が有馬、その他の諸城に建設を希望している教会のために、最も重立った寺院と地所を与え、これらの地に教会が建てられると、同地のキリシタン宗団は三つの司祭館に分担された。第一（の司祭館）は有馬である。ここは筆頭で便宜あり名立たる場所であることにより、司祭には当地出身の少年たちの神学校（セミナリオ）を同所に設置するのがよいと思われた。そのため、かつてドン・プロタジオ（鎮純）の父（義貞）がキリシタンになった時、（イエズス）会に与えた地所の代わりに「同所はふたたび仏僧が占有したので、今息子がこれをあらためて我らに与えた」、別の場所で、有馬の最良の地にあってはなはだ好適かつ十分な広さの場所を得た。」（資料６）（13）

二　第二期

第二期は、一五七九年七月に巡察師ヴァリニャーノが口之津港に上陸、寺院が多数破壊され、キリシタン教界が拡がってゆくが、秀吉の伴天連追放令のため教会が壊され、ついに秀吉が没する一五九八年迄である。キリシタン教界の解析に最も大事な時期になる。

ヴァリニャーノは、港町口之津に次ぐ目標として、所領の中心市である有馬の地にキリシタン町をつくろうとしたと考えられる。晴信は有馬の寺院を破壊し、その土地と家屋をイエズス会に与え、教会が建てられた。このことで城と教会が関係づけられた。当時は佐賀を中心に勢力を増してきた竜造寺との戦いが厳しく、晴信は島津の応援を得ることで、一五八四年、ついに竜造寺を打ち負かした。

（一）有馬のキリシタン町の形成

1)　町の全体像・・・有馬の中世集落

日本側資料として、十九世紀前期の絵図『肥前国高来郡ノ内嶋原領絵図』（資料７）（14）がある。松平主殿頭時代の島原領・田畑の範囲が黄塗りされている。現在の地図と重ねてみると、当時の集落構成は現在と相当に異なっていたと考えられる。地勢、町、骨格について次のようにまとめられる（図１参照）。

・有馬の海は大きく有馬川と大手川の二つの入江があり、日野江城の前は浅瀬の海が遠く広がっていた。有馬川は上流に従い、浦口川、轟川、西正寺川の支流がある。遠浅の海は、後に干拓による埋立てで新田開発され、現在の姿となった。

・主要な往還道は、有家から西の北有馬に入ると、春日社、橋口、本町へと進み、次に三尺町で南下して、有馬川を渡り、南有馬へ抜けるルートとなっていた。つまり往還道は、城の前に広がる遠浅の海の周りを大きく迂回していた。

・絵図当時の有馬の町は、城の南と東に、くの字型に町が連担していた。城前の東西通りは往還道で、さらに西方に今福、西正寺の集落が点在していた。明治以降、城西に役場や学校ができて、現在は城西に市街地が移る。現在、城東の麓に集落はなく、扇状地東方の山裾に集落が点在する。

城の東方には、「金蔵寺」の地名、春日神社が現存し、「卜光寺」「金蔵地」「称行寺」の小字名が残るなど寺社関係が集中する。鍛冶遺構、武士の遺構が現存し、城の東方の大手川流域に、城と寺院からなる中世集落らしき痕跡が集まる。さらに一五六八年三頭大夫文書資料に「金蔵寺　桃仙院（えけの乗）　宝福寺（えけ）　西光寺（たうえんけ）」（15）とある。このことから西光寺は北有馬の金蔵寺を本家とした会下寺で、有馬氏の地元金蔵寺とつながりが深い寺であったに違いない。

この町の配置に関して、昭和56年策定『史跡日野江城』には、城の西の浦口川に沿い有馬氏の家臣団の集落が営まれたという旨の記述がある（16）が、当時の町の捉え方や位置に疑問があり、指摘をしておく。

2）町と教会地

フロイスら、イエズス会士の人達は有馬の何処にいたのか。前項では日本側史料により検討したが、予断を持たず、この項では外国側史料により、彼らの言動を客観的にみることができれば、そこに彼らは居ただろう。まずは、教会施設は、日野江城の東方（海から見て右）なのか、南方（同前）なのか、西方（同左）なのか。これを指し示す資料が、少なくとも二つある。

「有馬という市・・・この市は屋形 Yacatas とよばれた古い領主たち[有馬氏]と、市が大きいというより土地柄のよさ、肥沃さ、またその地形のために有名である。余り大きすぎるというほどでもなく、市を富ますような商取引もない。海辺にありながら、海岸は長く平坦で低地のため海港でもない。だからこの市に行くには満潮の時を選ばねばならない。さもないと、どんなに舟が小さくとも、海辺に最も近い家にも行けないのだ。だが満潮時であれば、人家ばかりか、小川を上って古城の傍に舟を横づけすることもできる。」（資料８）（17）

図１　有馬の位置図（A日野江城跡、B原城跡、C願心寺、D北岡天満神社、E西正寺（地名）、F金蔵寺（地名）、G大手川、H有馬川、I浦口川、J轟川、K西正寺川）

資料８では、有馬の町は舟の便に恵まれず、商取引できる港町でなかった。満潮時だけ、「小川を上って古城の傍に舟を横づけ」たとある。現在、城の傍の小川は、城東の大手川（図１の**G**）か城西の浦口川（図１の**I**）の二つしかない。大手川は平地で満潮時に水深がとれるが、浦口川の方は川幅は狭く、川底は斜面なので舟は入れないだろう。もう一つ資料を上げよう。

「有馬（晴信）殿の義母のドナ・マリアは、非常に高い身分の人であったにもかかわらず、この冬には、厳しい寒さと深い雪の中を素足で北岡の聖母教会までミサ聖祭に与りに行きました。そこは城からかなりの距離があり、幾つかの川を渡って行かねばなりませんでした。」（資料９）（18）

聖祭のため、マリアは教会のフロイスと会ってから、遠浅の海路をまっすぐに北岡の聖母教会（図１の**D**、後で解析する）の方向に向ったのであろう。もし城西の浦口川

流域から北岡へ向かうのであれば、陸路の往還道を通ればよいことになる。城東にある大手川河口と北岡を結ぶ線上にしか、「冬の寒さと深い雪の中を素足で幾つかの川（大手川と有馬川の川筋か）を渡る」という構図は描けない。資料９から、大手口と教会が近いと容易に想像できる。要するに、資料８の城の傍の舟つき場、資料９のマリアとフロイスの情景とも、城の東方の大手川辺りの出来事を描いたものである。教会地が城西とする説④は、成立しにくいだろう。

(二) 教会地の動き

当時の有馬のキリシタン町の概要をとらえたところで、町に形成されたキリスト教界の解析をすすめる。まず城の内と外に分けて概要をとらえてゆく。

1) 「城の中」の解釈

日野江城内に教会施設を推定した説は、説②以外にはない。この説に関して、一九七〇年代からか「日本人の言う城のそばか下なのか、外人の言う城のそばか下なのか判定がしにくい」、「ポルトガル語の「城の中」というのを、「城下」と翻訳しなければならない」という作家や歴史家の解釈論まであった。「城の中」を「城下」と訳したり、こうした翻訳文をうのみにした歴史専門書、記事があるかも知れない。「日野江城跡」の史跡追加指定文には、「晴信は日野江城下にセミナリヨ（神学校）を設け」と説明されている（19）。重要な点なので、今後のために指摘した。しかし、書簡どおりに「城内＝城の中」だと考えた人はいたはずである。次の資料10は、ヴァリニャーノが自ら城内に入り行ったことの報告である（傍線は筆者）。彼が城内に教会施設をつくり宣教活動をしたことは明らかである。

「三年前になろうが、私は在日中、彼に洗礼を授け、彼と共にその領地のほとんどすべての者がキリスト教徒となり、彼等の偶像の寺社はことごとく破壊され、受洗しなかった少数の者も、今は日々受洗している。・・・有馬の城内に我等は非常に良好な場所を所有して居り、我等の部屋と立派な聖堂の外に、その地に貴族の子弟の神学校を設立した。これは三十人を収容するだけであるから小規模であるが、非常に便利で、良く設計されている。資金と収入が十分でなかった為に、それ以上大きく造れなかったが、増築が可能であり、事情が好転すれば拡張すべきである。この修院には、目下三名の司祭が、四、五名の修道士と同居している。」（資料10）（20）

2) 城の内から外へ

『日本史』を読み進めると、Ⅱ期の時代は、「城内」の教会施設の場面がやがて明るい場面に変化する。以前は城内に居たが、その時以後は城外に出たことになる。次の二資料はその前後を究めるものである。資料12に「数日前に」とあるので、プロタジオ（晴信）が城外に出る決断したのは一五八四年十一月頃と推断できる。よって、第二期をⅡａ期（一五七九～一五八四）、Ⅱｂ期（一五八五～一五九八）にわける。

「司祭は城内の貴婦人や子供らに何か災いが生ずるやも知れぬ危険な状態に対し、修道士一人と修道院の青年たちを伴って終夜、城を警備せねばならなかった。それ故、神学校において夜間は二名の司祭が修道士と共に番を定めて警戒に当り、教会の鐘を警鐘とし、校長は城より（不明）の鐘を用いてそれに答えた。」（資料11）（21）

「ドン・プロタシオの教会に対して抱いている愛は、私たちを驚かせるほどの寛大さを見せています。数日前に、セミナリヨの場所が、そこで育てられる子供のため狭いと言われましたので、自分の城の下に広いところを提供する旨を表わしました。そこにセミナリヨを移し、新しく立派な教会が建てられることを望んでいましたが、神父たちはセミナリヨに続いて家、空地と農園がある広い場所で、一方は有馬の城の前まで島が伸びている所をもっと適当であると思いました。そこには数人の武士や貴人が数代前から住んでいた」（資料12）（22）

二資料の場面の間に戦敵の竜造寺隆信が戦死（23）したことで、場面が暗から明に移ったと理解できる。資料11は、戦いに出るため城の安全が司祭に任されていた。鐘音の伝達、夜間の警備厳戒の中でとった警備体勢から、城と教会との離れぐあいは、昼間は見えるが夜間は鐘の音で交信できる距離にあったと想定できる。

(三) 教会とセミナリヨの位置解析

第二期において、教会施設の位置は城内から城外へ移行したと解いた。まず、それぞれの教会施設について述べる。

1) 城外の教会地

教会施設が城の内から外へ出た時の状況について、フロイスは別の資料13でも述べている。この二資料から、プロタジオは城の下に広い所を提供したが、神父たちは地続きの場所を選んでそこを教会とし、セミナリヨはそのまま城内に残ったことがわかる。要するに、地続きの場所に出たのは教会のみであったことになる。セミナリヨを城外や城下とした説⑤は第二期には成立しにくい。

「ドン・プロタジオは、神学校が少年たちにとって狭苦しく不便なことを訴えられると、城の麓に一つの広大な地所を提供し、そこに神学校を移し、新しく荘厳な教会を建てることを望んだ。（だが）司祭たちには、それは（今）いろいろの人が所有している平地や菜園の広い土地が最適と思われた。そこは（それまでの）神学校とは地続きで、環状の島のような形をしており、有馬城の正面で終っていた。その地区には先祖代々長年住みついている貴人や身分の高い人々がいた。」（資料13）（24）

この城を出たⅡｂ期の教会は、一五九八年に取り壊されるまで同所に存続した。こ

の教会の環境を記した資料がもう一つあり、所在解明の糸口を与えてくれる。

「そうして同じ十一月二十一日、金曜日に、さきに挙げた役人らは、お城の前を流れる川のほとりの、有馬の大天主堂のあった場所へ赴き、」（資料14）（25）

つまり教会は、「城の麓の平地」で、「城の前の川のほとり」にある。加えて前項から、「城の東方」の大手川沿いと解析した。まとめると、「城東の麓の大手川右岸平地」となるが、現在、これに適う地は（幸運なことに）唯一ヵ所しかない。そこは、大手口の脇に位置している小字「小堰」の地である（図2）。

2）　教会地固有の特徴

前のフロイス資料13に記された幾つかの教会地の特徴を取り出して、現在の「小堰」の地を比べて検証してみる。

・資料に、「環状で島のような形」で、「有馬城の正面で終っていた」とある。現在の「小堰」の地は、城の崖下に道と川に挟まれた「おむすび形」をして囲われている。また、その小字範囲は大手口の間近まで達している。敷地の形状や範囲がフロイスの記述とほぼ一致する。

・資料に、「城の麓に一つの広大な地所」とある。城東方の大手川流域は北有馬最大の扇状地形なので、城の麓から見たフロイスの景観描写に適っている。

・さらに資料に、「先祖代々の貴人や身分の高い人々」「空地と農園がある広い場所・・・数人の武士や貴人が数代前から住んでいた」とある。前項（一）で、城東方に中世集落が形成されていたと述べた。資料13はこの中世集落を補完説明する内容となっている。当地は水運、生活水の水利条件が良い地だったと思われるが、大手口近くが先祖代々の武士や貴人の地であったとは、説得力の高い内容である。つまり、長年の貴人、武人が住んだ地に、城主の指示で教会が表に出て入れ替わり、一五八四年を境にキリシタン集落が形成されたことになる。

以上、幾つかの土地固有の地形条件に適合したことから、Ⅱb期の教会地は「小堰」の地に位置したと考えて間違いない。

3）　セミナリヨの位置

続いて、資料13に教会地とセミナリヨが「地続き」であったことに着目して、セミナリヨの位置がたどれるのではないか。城内で、「小堰」に地続きの小字を探すと、「城山」「二ノ丸」「中尾」「小屋敷」の四ヵ所が該当する（図2）。

一九六〇年代には、セミナリヨ城内説の文献があった。いずれも根拠とした資料説明はないが、チースリク氏は「二ノ丸」辺りの写真を掲載し、片岡弥吉氏の例示によると浜口叶氏は「城山の南側」にセミナリヨがあったと推定したようだ（26）。しかし当時は戦国時代の最中である。城の前方の「城山」「二ノ丸」の地は、当然、出陣、敵の迎撃などの前線地であるので、その地にセミナリヨを建てたと想定するのは無理があるだろう。これに対して、残る「中尾」と「小屋敷」の地は、「城山」との間に谷を挟み、城から離れた後方地にあるので、よりふさわしい地と考える。

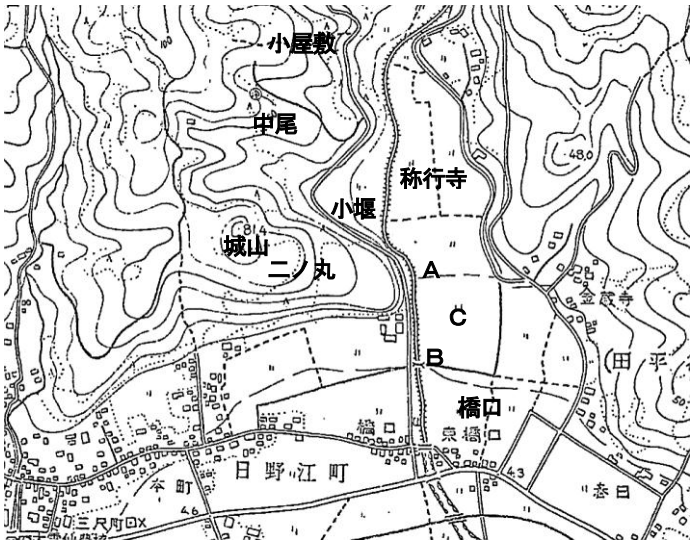

図2　日野江城と大手川流域（A大手口、B日野江城海橋柱跡、C広場、太字は小字名）

さらに、セミナリヨの場所を描写したフロイスの記述から、地続きであるセミナリヨの各候補地に検討を加えてゆく。次の資料15は、セミナリヨの地から開けた方向を見た時の描写である。城より前方の「城山」「二ノ丸」の地では、「静かで奥まったところ」「地形上、おのずから守られていた」とする箇所の表現に合わないだろう。「そこに住む者には広々とした感じを与え」た箇所とは、扇状地の上から下方を見晴らす場面が想定されるが、上方がさらに高台なら「静かで奥まった」ことにもなる。「中尾」「小屋敷」は正にこの条件に適う。扇状地に対する尾根の位置と向きから、「中尾」の方が眺望は開ける。

「その場所は、静かで奥まったところで、そこに住む者には広々とした感じを与え、（また）地形上、おのずから守られていた。」（資料15）（27）

さて「中尾」「小屋敷」の何れが該当するか。前の資料11は、城と教会地との位置関係を示した描写で、教会の警鐘の音に城の鐘で答えていた。現在の地形をみると、

「城山」に続く「中尾」は大きな谷を挟み、次なる「小屋敷」は小さな谷を挟み尾根が続く。資料の鐘の音伝達が可能なのは、「城山」本丸に近い方の「中尾」の尾根がふさわしく、遠い「小屋敷」では両者の伝達は困難であろう。「中尾」の現地を訪れたら、深い谷と三、四段の段畑があった。その中の最も広い段畑から本丸方向の山稜を目視で確認可能で、間に谷を挟んで直線距離で約百四十メートル、鐘の音のやり取りが可能な距離内にある。以上の根拠により、第二期のセミナリヨは「中尾」に所在したと考えてよいだろう。

(四) キリシタン町の形成（Ⅱ a期）

1) 城内の教会施設

前の資料10と次の資料16・17・18をまとめると、一五八〇年の十月には、城内に司祭の住居とセミナリヨ、市から四分の一里のところに少年の遊び場を設け、十二月には城内の教会を完成した。セミナリヨは、大きな家屋数棟からなり、中庭外廊付き、収容人数三十名と小規模ながら個室化されていた。セミナリヨの人数は、一五八〇年には二十二名、八二年は二十六名、八四年には四十名近くに増加し、セミナリヨの教会と接したところに学校を完成させ、百名の少年たちが来るまでに広がった。

「別の場所で、有馬の最良の地にあってはなはだ好適かつ十分な広さの場所を得た。同所に我らの住居（アビタサン）と神学校（セミナリオ）のために幾つかのものを新たに作って整え、神学校はかつて仏僧が有し、右の目的に適う非常に大きな家屋数棟を加えることによって今や完成しつつある。それらの家屋はドン・プロタジオが与え、これによってたいそう美しく大きな部屋が作られ、ここには三十名以上の少年が至って快適に入ることができた。すべては十分に計画されているので、はなはだ便利であるほかに、少年たちの遊びに役立つ広々とした中庭や外廊があり、現在同所には少年二十二名がいるであろう。デウスの御助けによって、日々その数は増えつつある。また立派な教会を建てるために木材を整えているが、これにはドン・プロタジオが我らに与えた数ヵ寺の多量の木材が大いに助けとなった。市から四分の一里のところに、少年たちが遊ぶのに適した非常によい場所（オルタ）があり、教会が建っているが、同所も（有馬の）領主が我らに与えたものである。」（資料16）（28）

「（巡察）師は、有馬の最良の地所の一つに、この目的のために、はなはだ好都合で適した場所を所有していた。その地に、（神学校に）ふさわしい家屋とか、広い庭とか、少年たちが遊ぶのに役立つ外廊などを作っていった。その場所は、静かで奥まったところで、そこに住む者には広々とした感じを与え、（また）地形上、おのずから守られていた。・・・（住居）と離れた寝室、立派な広い教会などが与えられた。そこから四分の一里の地に、少年たちの遊び場として別の場所があてがわれたが、それは同地にあったもっとも立派な寺院の一つであった。」（資料17）（29）

「この神学校の教会と接した所に、キリシタンたちが子弟の教育のために建てている学校が今や落成せんとしている。教会へ学びに来ている少年たちは百名を超え、教義の問答にも、また祈祷にも非常に熱心で毎日ミサに与り、これが終わると三度、パーテル・ノステルとアヴェ・マリアを唱え、毎日、詩篇の一つを歌う。」（資料18）（30）

2) 遊び場

セミナリヨとは別に、少年たちの遊び場が設けられた。資料16・17をまとめると、遊ぶのに適地で、領主が与えた寺院の一つで、教会が建っていたとある。この場所は諸説あるが、根拠まで示されていないので、ここで位置の解析を試みる。

『日本史』に、ニシュウと称する仏僧が邸と地所を提供し、「聖母の聖堂」を作ったと資料19にある。これが資料9でマリアが向かった「北岡の聖母教会」と推測できるが、これのみで確定とはいかないだろう。

「このニシュウと称する仏僧は、既述のように、ただに殿、その他の貴人たちから敬われていたばかりでなく、狡猾さと器用さで、民衆から相当な尊敬を集めていた。・・・（仏僧）は教えを深く理解した後キリシタンになることを望むようになると、・・・そこで我らは、彼の面前で、それらいっさい、および彼が祈りに用い悪魔を呼ぶのに用いていた数珠を焼いた。その翌日、彼は洗礼を受け、ジョアンという教名を授けられた。・・・彼はこのデウスの御憐れみに対する感謝の印しとして、自らの邸と地所を提供し、そこに聖母の聖堂（エルミダ）を作ることにした。そして司祭が承諾してくれれば、そこで隠遁者として過すことにした。」（資料19）（31）

この遊び場はセミナリヨ教育の一部であった。普段は城内にいたので、海水浴などの遊びを目的とした。従って、海の近くで、「市から四分の一里（約一三八八メートル）のところ」となる。城前の通り中央から北岡天満神社入り口まで道のりは約一三五〇メートルであるが、有馬の社寺のうち「市から四分の一里」の距離に最も近く、しかも海に近いのは当地しかない。

(五) キリシタン町の形成（Ⅱ b期）

1) 城外の教会施設

前項で、城内の教会施設の位置と構成を明らかにした。続いて次の資料20から、城の内から外への移行にともない教会施設は次のように変化した。①新しい教会の側に神父の住居を建設した。②旧来の神父たちの住居全部と今のセミナリヨの住まいはそのままセミナリヨに残した。③従来の大きな教会を良く改造し、一五八五年七月二

十二日、セミナリヨをそこに移転した。④新しい教会のすぐ側に、セミナリヨが今まで使っていた家で信者のミサを行った。Ⅱｂ期をまとめると、教会は「小堰」に移転、セミナリヨは「中尾」のまま、地続きで再構成されたと考える。このセミナリヨは、薩摩勢の島原半島占拠の際一五八七年春、浦上に移転した。

「昨年、計画されていた工事がすでに始まり、神父たちは住まいを新しい所に移し、旧来の住居は全部、セミナリヨのために残されました。新しい教会のための木材を、みんなが、「くりき」と言って山から引き出し持ってきます。日本人は神への愛のための行為をそのように言っています。最初に木材を運びはじめたのはこの地方で第二の人物であったドン・ジョアン左兵衛殿で、その後に皆がつづきました。・・・今のセミナリヨの住まいは、彼らのために新たに建てられる家より立派です。それは高来の領主ドン・プロタジオが、今、建築中の新しい教会を建てようと望んだので、数年前に建てられた従来の教会も十分に大きなものであったので、セミナリヨのために残されました。その目的のために良く改造されて七月二十二日セミナリヨが移転しました。信者のためのミサは、セミナリヨが今までに使っていた家で行われます。その家は、今、新しく建てられる教会のすぐ側にあります。」（資料20）（32）

2)　広場

次の資料21には、復活祭の行列が方形の大広場を廻って行うとあり、日本の中世集落で西欧のキリスト教行事が催されたことが記述されている。これまでの解析から教会が「小堰」、川が「大手川」であることを手掛かりに、次は広場の位置を探る。

「我等は広場に入るため河上の橋を通った」とあるので、大手川を挟んで教会の反対側、つまり扇状地裾野の側に広場があったことは確実である。広場には「周囲の道路」があり「二方には家屋」とあるので、そこは集落道の構成だったと思われる。広場四辺の道のうち西側一辺は、大手川沿いの道であったことは確実である。

問題は道の何処から何処までかである。残る一辺は「他方は城」と描写され、広場北側らしいが、他辺と異なり、小川や一般家屋と接しないようだ。現在、城の大手口と金蔵寺集落をつなぐ東西の直線道がある。ここを広場北側の境道とすれば、道の北方は小字「称行寺」の寺院地、南方の「広場」は領主地であるので、一般家屋のない条件と一致させ得る。現地の境道に立つと、西方に雄大な城山の傾斜地が眺望でき、「他方は城」の情景が得られ方向の疑問は氷解する。境道と大手川との交点（図２の**A**点）との対応点を、資料８の「舟つき場」として、現在の「日野江城海橋柱跡」の遺構（33）地点（図２の**B**点）として、その距離を参考に広場を想定すると、地形図上にほぼ方形の約百二十メートル四方の大区画が見てとれる（図２の**C**）。広場東側の道は現在の町道北谷線の延長、広場南側の道は往還道となるので二方向に家屋が並んだ可能性が高く、書簡に描写された四辺の土地利用に適う遺構配置が現在でも得られる。

「この行列は方形の大広場を廻って行うのであったが、広場の一方には聖堂との間に小川があり、他方には城また他の二方には家屋があった。広場の角々には枝をもって胸壁を作り、その周囲の道路は枝をもって飾り旗を掲げた。・・・我等は広場に入るため河上の橋を通ったが、ここには樹枝の門が数ヵ所あり、これを出て立派に飾った車があり、その上に（塔の形のものであった）五人の少年が天使の姿で立っていた。」（資料21）（34）

この広場について、資料22から検証する。当資料は第Ⅲ期だが、この時に教会地と広場を交換したようである。広場は有馬殿の所有地で、「城の前で、広く良好な場所」「満潮の時にはその所まで満ちて来て美しい」ことから、この第Ⅱｂ期で扱う広場と同じと考えられる。資料22に「この土地は私たちが残した土地より三倍ぐらい大きく」とある。教会地と解析した島状の小字「小堰」は面積約四千五百平方メートル、先ほど述べた広場とする場所は、道路分を除き百十五メートル四方とすると、面積は一万三千二三五平方メートル。広場は教会地の約三倍の記述に一致することから、小字「橋口」の一部区画にこの広場があったと考えてよいだろう。

「有馬殿は城の前に土地を持っていて広く、良好な場所で、満潮の時にはその所まで満ちて来て美しい。この所に有馬殿が新妻を迎えるため家を建てた。この土地は私たちが残した土地より三倍ぐらい大きく、その地域一体を建物と共に寛大さをもって私たちの土地と交換するだけではなく、私財を投じて立派な教会を建てました。」（資料22）（35）

3)　ミゼリコルジア（慈善院）

有馬では一五八五年にミゼリコルジアの組が発足した。ミゼリコルジアについて、有馬氏の菩提寺であった台雲寺（現在の願心寺）だろうと推定されているが、その説明や根拠は見ていない。次の資料23によれば、コエリュ神父の葬儀の前に舟で有馬の浜まで行き、さらに遺骸を密かにミゼリコルジアまで運び、当日は教会を出て行列しミゼリコルジアまで向かっている。後日に行列の出発点となる教会がある大手川側へ上陸したとは想定しづらく、もう一方の有馬川をさかのぼった（さらに支流の轟川（高江川）をのぼった）と考えられる。さかのぼる舟のルートと、教会から西進した行列通りとの交点がミゼリコルジアの位置と考えられる。有馬川流域で川と接する寺院は願心寺のみで、他の寺院は川から百メートル以上あるので「遺骸を密かに」運ぶことは難しいだろう。

「我々は（口之津で）乗船し、夜半少し前に有馬の浜に到着し、そこから遺骸は密かにミゼリコルジアに運ばれた。・・・火曜日の午後、行列は有馬の教会を出て、遺骸が安置されているミゼリコルジアに向った。・・・ミゼリコルジアの建物は、ある非常に広くて長く、美しい通りに面しており、この行事のために

清掃され整備されていたので、少なからぬ趣きと華やかさを添えていたが、期待されたとおり、大群衆によって整然と見物されることになった。(p.403)」(資料23)(36)

三　第三期

第三期は、秀吉の死後に朝鮮の役から晴信が帰り、破壊された有馬の教会などを再興する(Ⅲ a期)が、やがて家康の迫害により殉教地となり有馬氏の島原退去まで(Ⅲ b期)とする。

(一) キリシタン町の再形成(Ⅲ a期)

1) 新しい教会、コレジヨ、セミナリヨ

晴信が朝鮮より帰国すると教会施設は破壊されていたが、再び教会施設が作られ、キリシタン町が再興されたことが、資料24・25からうかがえる。二資料をまとめると、一六〇一年に、晴信が新妻のために広場に建てた邸宅をイエズス会に寄進してコレジヨ(学院)に作りかえ、さらに教会を建てることを決めた。一六〇二年に教会が完成し、一六〇三年に長崎からセミナリヨが移転した。

建築的に外国の様式を導入したと思われる記述がある。学院は西洋の様式にかない、教会は巡察師ヴァリニャーノが彼晴信に与えた図面を基にしたもので、長崎の教会を模していた。三廊式、外廊があり、日本で最も風格があり贅を尽くしていたとある。これは、設計、様式ともに、十七世紀初頭に西洋式が導入されたことを表わすとみられ、単なる日本建築の延長であったとは思えない。

「市のなかでは最良かつもっとも快適な場所にいとも大きく威厳のある邸宅を幾つか彼女のために新築した。それらの邸宅は海に近く或る大きな広場の端にあり、彼の居城の膝元であった・・・邸宅にあるすべての庭園と菜園のほかに、併設されている家臣の家屋をも含め、邸宅をイエズス会に寄進することに決めた。・・・むしろ邸宅はイエズス会の学院のために意図して作られたかのように我らの様式に非常にかなっていた。・・・邸宅が譲渡され、すでに(イエズス)会の学院になっているとはいえ、この善良な国王の情熱と良き志はこれに留まることなく、司祭らがそこに教会を有していないことを知るとただちに教会を建てることに決めた。その教会は日本のなかではもっとも風格を備え贅を尽くしたものであり、国王の願いにより、巡察師が彼に与えた図面を基にしていたが、三つの祭壇を持ち、その周囲に縁側がある長崎の教会を模していた。また、その敷地は彼の居城や邸宅に面するきわめて適切な場所であり、海側には広大な空地があった。」(資料24)(37)

「もと長崎にあったセミナリヨを同地に移し、・・・昨年通信した教会堂の新築が殿のおかげで立派に完成したので、・・・武士や殿の宮廷の人たちも式に列し、高来全体が日本一の教会堂で行われる最初のミサ聖祭を見るために来た。・・・・・・聖木曜日には同所の中央の教会堂から、終点に近いミゼリコルジヤまで整列行進をし、殿と殆ど全領の人たちが参加したが、長い間有馬で見たことがないことで、皆大いに喜んだ。」(資料25)(38)

(二) 町の構成

前の資料24にある「大きな広場」とは、「海に近い」「広場の端が居城の膝元」「海側に広大な空地」とあるので、第二期の広場と同じとみてよい。コレジヨは広場の北西端、教会は広場の中央とした建物配置がうかがえる。次の資料26からセミナリヨがコレジヨと建物続きとあるので、広場の中央に教会堂、大手口端の方からコレジヨ、セミナリヨ、教会堂が並び、教会敷地の海側(前)は広大な空地になっていたとある。資料25から、中央の教会堂から、町の大通りを行進してミゼリコルジヤまで行くことで、有馬の町の主軸が復活したことがわかる。第三期の教会やセミナリヨは、城東にある領主の広場に集められたので、説④⑤は成立しにくいだろう。

このように、第三期になると城外の広場に教会関連施設を全て集め、城と教会広場を併置したキリシタン町を形成した。セミナリヨでは、生徒九十名、神父・イルマン五名、勤務青年三十名からなり、ラテン語・日本語の語学、日本文学・ポルトガル文学、歌・楽器の音楽が教育された。

「この町にはセミナリヨがあり、そこには神父一名、イルマン四名、生徒九十名、そしてそこに勤務している青年三十名がいる。このセミナリヨではラテン語と日本語の勉強以外に歌やいろいろな楽器の勉強、そして日本文学とポルトガル文字の書き方の勉強がある。ラテン語教師は三名、歌の教師は一名、音楽を教える数名がおり、二名が文学を教えている。[ジョアン・ミラノ]神父は生徒の係であるが、すべてにおいてコレジヨの院長に従っている。コレジヨとセミナリヨの建物はつながっている。」(資料26)(39)

(三) 牢、海港、殉教地(Ⅲ b期)

徳川期になっても禁教は続き、一六一二年に、晴信は岡本大八事件で甲斐に配流され、有馬のコレジヨと司祭館は厳しい迫害の中で破壊された。資料27は、中でも象徴的な一六一三年のマダレイナら八名の殉教の模様である。この殉教地の箇所について解析を試みる。

資料の「目抜き通り」とはおそらく城前の往還道で、牢はその中程にあったのであろう。殉教者は、牢を出て、海の入江まで行列し、そこから乗船し殉教地へ向かった。

この入江とは何処か。「ひき潮のときは水は膝までも達しなかった。」「潮は満ちていなかったから、群衆はやすやすと入江を渡ることができた。」という表現は、大手川の入江でのみ可能な表現である。殉教地は、舟につかまる人々が歩いて行ける、遠浅沖合いの広場状の地であったことから、大手川と有馬川にはさまれた沖合いの堆積地であろう。両河川の間に舌状に堆積地が広がっていたらしい。そのうち、有馬の広場中央に位置した教会正面（南）方向にあたる堆積の先端部辺りが、殉教地でなかったかと推測する。

「有馬殿（直純）は・・・妻子も一緒に捕えよと命じた。・・・彼らは・・・牢に入った。それは有馬の目抜き通りの繁華街にあった。・・・役人どもは都市からほど遠からぬ大きな広々とした広場に彼らを火あぶりにすべき場所をしつらえ始め・・・牢から市の外にある海の入江にいたるまで群衆があふれていた。・・・荘厳な行列は聖なる戦士らを守って前述の入江に到着した。入江は浅く、ひき潮のときは水は膝までも達しなかった。・・・殉教者らが乗船すると、舟につかまる人々が余り多かったので舟はまるで空中を運ばれているように見えた。陰月の二十三日で満潮時はすぎていて潮は満ちていなかったから、群衆はやすやすと入江を渡ることができた。殉教者らは舟を下りると・・・殉教の場に定められた場所に進んで行った。」（資料27）（40）

一六一四年に破壊された教会を基礎まで破壊し、直純は日向延岡に移封されたので、キリシタン町の痕跡はこの時にほとんどなくなったのであろう。

謝辞

本研究はＪＳＰＳ科研費26420633の助成を受けたものです。また資料収集にあたり、南島原市役所、口之津歴史民俗資料館、島原図書館、有家図書館、深江図書館、長崎総合科学大学附属図書館の方々にお世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

脚注

（1）結城了悟「有馬のセミナリヨの位置」『大村史談』、第二十三号、五三頁、一九八二年

（2）Ｈ・チースリク『キリシタン人物の研究』、五四頁、吉川弘文館、一九六三年

（3）『南有馬町郷土誌』南有馬町教育委員会、二二二頁、一九六九年

（4）有馬のセミナリヨ建設構想策定委員会『「有馬のセミナリヨ」関係資料集』、北有馬町役場、二八一頁、二〇〇五年

（5）北有馬町教育委員会『史跡日野江城跡　環境整備計画』七頁・十八頁、一九九三年、近藤宗顕『有馬抄録』七〇～七四頁、二〇〇二年

（6）一五八四年八月三十一日付、長崎、ルイス・フロイス書簡

（7）根井浄『修験道とキリシタン』二三六頁、一九八八年

（8）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』9、第一部46章、一九七九年

（9）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』9、第一部49章、一九七九年

（10）永禄四年『肥前之国日記』

（11）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』10、第一部109章、一九七九年

（12）根井浄『修験道とキリシタン』七五頁、一九八八年

（13）一五八〇年十月二十日付、豊後、ロレンソ・メシア師、一五八〇年度日本年報

（14）『肥前国高来郡ノ内嶋原領絵図』松平文庫所蔵

（15）永禄十一年『肥前日記』

（16）北有馬町教育委員会『史跡日野江城跡　保存管理計画策定書』二二頁・三九頁、一九八二年

（17）佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注『アビラ・ヒロン日本王国記』第15章、一九六五年

（18）一五九二年十月一日付、長崎、ルイス・フロイス師、一五九一・九二年度日本年報

（19）遠藤周作『切支丹の里』九三頁、一九七一年、Ｈ・チースリク『キリシタン史考』一四頁、一九九五年、月刊『文化財』二月号（六〇五号）、文化庁文化財部監修、三一頁、二〇一四年

（20）一五八三年十月二十八日付、コチン、アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ『日本要録』第三章、松田毅一・佐久間正編訳『日本巡察記』桃源社、一九六五年

（21）一五八四年八月三十一日付、長崎、ルイス・フロイス書簡

（22）一五八四年十一月二十九日付、ルイス・フロイス書簡

（23）天正十二年三月二十四日(1584.5.4)、竜造寺隆信戦死

（24）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』10、第二部54章、一九七九年

（25）佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注『アビラ・ヒロン日本王国記』第23章、一九六五年

（26）日野江城の写真説明に「左の高台にある日野神社は有馬城本丸の後で、セミナリヨは中央に見える畠のところにあった」（Ｈ・チースリク『キリシタン人物の研究』吉川弘文館、一九六三年）、片岡弥吉「イエズス会教育機関の移動と遺跡」『キリシタン研究』第十一輯、四頁、一九六六年

（27）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』10、第二部20章、一九七九年

（28）一五八〇年十月二十日付、豊後、ロレンソ・メシア師、一五八〇年度日本年報

（29）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』10、第二部20章、一九七九年
（30）一五八四年一月二日付、ルイス・フロイス師、一五八三年度日本年報
（31）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』10、第二部35章、一九七九年
（32）一五八五年十月一日ルイス・フロイス
（33）北有馬町教育委員会『史跡日野江城跡　環境整備計画』七頁・十八頁、一九九三年
（34）一五八五年日本年報、村上直次郎訳『イエズス会日本年報』下、雄松堂書店、新異国叢書3、一九六九年
（35）Alessandro Valignano, 1603, “Catalogo dos Collegios, Csas e Residencias”, cf. Josef Franz Schutte S.J., “Monumenta Historica Japoniae, I ”, Romae 1975, p. 467
（36）松田毅一・川崎桃太訳『フロイス日本史』11、第三部4章、一九七九年
（37）一五九九年・一六〇一年、日本諸国記（フェルナン・ゲレイロ編『イエズス会年報集』第一部第二巻
（38）準管区長パードレ・フランシスコ・パチェコがイエズス会総会長パーデレ・クラウディオ・アクワビーバに呈した一六〇三年三月一日（慶長八年二月十九日）付の書簡
（39）Joao Rodrigues Giram, 長崎, 一六一〇年三月十日, Jap. 56, 190ss.
（40）佐久間正訳注・会田由訳・岩生成一注『アビラ・ヒロン日本王国記』第15章、一九六五年